

夫婦の生活形態特性が夫婦関係・家族の状態不安に及ぼす影響¹⁾

—中学生を持つ共働き家庭を対象としたワーク・ライフ・バランスの検討—

福田佳織*・森下葉子**・尾形和男***

Impact of Married Couples' Lifestyle Traits on their Relationship and Family State Anxiety

Kaori FUKUDA*, Yoko MORISHITA**, and Kazuo OGATA***

This study investigated married couples' lifestyle traits that contribute to Work Life Balance (WLB) and clarified the impact of their lifestyle traits on their relationship and family state anxiety. A questionnaire was administered to 448 families with middle school students where both parents worked. A hierarchical cluster analysis identified the following lifestyle trait clusters: (1) married couples with family and free time; (2) married couples with free time; (3) married couples with low activity levels; (4) married couples with moderate activity levels; and (5) married couples with family and work. The results of a one-way analysis of variance indicated that married couples with family and free time, married couples with moderate activity levels, and married couples with family and work had better marriages than married couples with free time and those with low activity levels. State anxiety regarding their parents was also found to be lower for married couples with family and free time than for those with low activity levels. This suggests that a high level of family participation by the couple leads to WLB.

key words: WLB, lifestyle trait, married couples' relationship, state anxiety, middle school student

問題と目的

近年、ワーク・ライフ・バランス（以下、「WLB」）の重要性が謳われるようになった。その契機となったのは、内閣府（2007）の「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」である。そこには、「誰もがやりがいや充実感を感じな

がら働き、仕事上の責任を果たす一方で、子育て・介護の時間や、家庭・地域・自己啓発等に係る個人の時間をもてる健康で豊かな生活ができるよう、今こそ、社会全体で仕事と生活の双方の調和の実現を希求していかなければならない」とあり、仕事と生活の両立は人生の生きがいや喜びの倍増につながるとしている。

¹⁾ 本研究の実施にあたり、科学研究費（基盤研究（C）(1) 課題番号 23530661、研究代表者：尾形和男）を受けた。調査の実施にあたり、多くのおみなさまのご協力を頂いたことに心より感謝申し上げます。

* 東洋学園大学人間科学部

The Faculty of Human Sciences, Toyo Gakuen University, 1660 Hiregasaki, Nagareyama-shi, Chiba 270-0161, Japan
e-mail: kaori.fukuda@tyg.jp

** 文京学院大学人間学部

The Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University, 1196 Kamekubo, Fujimino-shi, Saitama 356-8533, Japan
e-mail: mrstyhk@bgu.ac.jp

*** 愛知教育大学教育学部

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, 1 Hirosawa, Igaya-cho, Kariya-shi, Aichi 448-8542, Japan

現所属：埼玉学園大学人間学部

The Faculty of Human Studies, Saitama Gakuen University, 1510 Kizoro, Kawaguchi-shi, Saitama 333-0831, Japan
e-mail: k.ogata@saigaku.ac.jp

WLBは、少なくとも仕事と生活の双方に関与することが前提となっているはずであるが、Kahn, Wolfe, Quinn, Snoek, & Rosenthal (1964)は、人間の所有時間は1日24時間であり、役割が増えると1つの役割に割く時間や能力が足りず、葛藤を引き起こすとしている。これはワーク・ファミリー・コンフリクト（以下、「WFC」）と呼ばれる。このような欠乏仮説(Marks, 1977)に基づく、人は、1つの領域に力を注ぎ、他の領域への関与は最低限に抑える方が、精神的安寧が得られるとも読み取れる。それは、WLBの意義を覆すことになる。

もちろん、Sieber (1974)のように、多重役割を担うことでそれぞれの役割からポジティブな影響を受け、人間的に成長し、精神的にも身体的にも健康になるという増大仮説を提唱する者もいる。また、ワーク・ファミリー・ファシリテーション(WFF)と呼ぶ同様の概念も存在する(Voydanof, 2005)。これらの概念はWLBの有用性にも通じる。

両者は一見相反する概念のように思われるが、多重役割のそれぞれにどのような力を注ぐのかという「関与の度合い」の相違が、こうした多重役割に対する効果と弊害といった相違を生みだしているのではないだろうか。つまり、適切な調和のあり方を見出すことが必要なのである。

とはいえ、調和のあり方は個人裁量によるところが大きいことから、ある特定の生活形態の特性を“WLBの取れた状態”として呈示することに違和感があるかもしれない。しかし、北欧のようなWLBの良好な国では、基本的ワークとライフの配分は制度化されており、これらの国々は生活全体に対する国民の評価の上位を占めている(丸尾, 2010)。つまり、効果的な仕事と生活の調和の傾向(WLBの取れた生活形態)の共通特性を明らかにすることには意義があると考えられる。そこで、本研究では、どのような生活形態の特性が最もWLBの取れた状態かについて検討する。

次に、この生活形態の特性が影響を及ぼす対象についてであるが、本研究では、夫婦の生活形態の特性が家族に及ぼす影響を捉える。もともと、この憲章は個人の充実した生き方の重要性、また、その充実した生活が社会に及ぼす影響に着眼してきた。そのため、これまでの研究では、個人の生活形態の特性がその個人の精神的健康(例えば、島田・島津・

川上, 2012)や個人の意識・行動とどう関連するのか(例えば、岩下, 2010; 久保・倉持・岸田・及川・田村, 2013; 佐藤, 2013)に焦点があてられてきた。しかし、仕事と生活とのバランスを論じるうえで、その個人と関与の深い家族にも焦点化する必要があるだろう。家族システム論(家族自体が1つのまとまりを有する組織であり、家族成員は家庭内外と直接的・間接的に、そして双方向に作用し合っている(Minuchin, 1980))に従えば、個人の生活形態の特性は他の家族成員に何らかの影響をもたらす(もたらされる)ことは間違いない。さらに、配偶者が存在すれば、配偶者の生活形態の特性との兼ね合いを考慮することが家族への影響を考えるうえで必須となる。特に、近年では、女性の社会進出が進み、女性(母親)のWLBを無視できない状況にある。こうした理由から、本研究では、共働き夫婦の生活形態の特性が、父親・母親・子どもにもたらす影響を検討し、どのような夫婦の生活形態の特性がWLBにつながるかについて明らかにする。

続いて、調査対象の家庭についてであるが、家族のライフステージによって夫婦の生活形態の特性が家族に与える影響は異なると考えられる。本研究では、「中学生のいる共働き家庭」を対象とするが、その理由は以下のとおりである。まず、未だM字型にある女性の就業率は、我が子が中学生頃になる45~49歳の年齢層でピークを迎える(内閣府, 2013)。このように共働き家庭が増える時期であることが一点である。次に、青年期の子どもを持つ親は、対社会的な関係において担う役割が増える上、母親の就業に伴う家族の役割分担の調整、個人の余暇活動の設計が必要になる(Carter & McGoldrick, 2005; 望月, 1980)。これらのことから、中学生を持つ夫婦は生活形態の見直しを余儀なくされる時期にあるといえ、この時期のWLBを検討することは有用と考えられる。

夫婦の生活形態の特性が家族に及ぼす影響を捉える上で、夫および妻の双方からみた夫婦関係、父親・母親・子ども(中学生)の状態不安に着目する。上記の通り、この時期は夫婦関係の再構築を必須とすることから、夫婦の生活形態の特性を夫婦関係という指標で検討することは重要であろう。また、状態不安は様々な内外の刺激によって喚起され、頑健といわれている人にも生じうる種類の不安であり、

身近なストレス反応といえる(佐藤, 2011)。身近ではあるが、ストレス反応や神経症の様々な症状の中心には、何らかの「不安」反応が認められる(坂野・菅野・佐藤・佐藤, 1996)ことから、この状態不安を取り上げることは意義があるといえる。

最後にWLBの領域についてであるが、ここまでWLBを仕事と生活とのバランスが取れた状態として論じてきたが、本研究では、WLBを「仕事」・「家庭」・「余暇活動」・「地域活動」の4領域への関与特性から検討することとする。先述の「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」にもあるように、実際WLBには様々な領域が含まれている。WLBに関する先行研究として例えば、小野(1993)は「仕事」・「家族」・「レジャー」の3領域に対する関心と行動の配分に関する実証研究を行っている。また、赤岡(1993)は労働者の生きがいは「労働生活」・「家庭生活」・「社会生活」という領域で自己が尊重され、自己実現していくことによるとしている。赤岡(1993)の3領域に対し、渡辺(2009)は「職業生活」・「家庭生活」・「社会生活」・「自分生活」という4領域を挙げ、これらの生活の充実が求められるとしている。同様に田村(2009)は、「労働生活」・「家庭生活」・「地域生活」・「余暇生活」のバランスを重視することの重要性を提唱している。さらに、安齋(2012)は、「会社生活」・「家庭生活」・「社会生活」・「自分生活」・「学習生活」の5つの領域モデルを提唱している。

このようにWLBを扱う際の領域は研究によって若干異なるが、上記の「レジャー」、「自分生活」、「学習生活」は個人がやりたい事柄を自由に選択できる時間帯として、「余暇活動」に含めることが妥当であろう。そのほかの領域については、「仕事」、「家庭」、「地域活動」にそれぞれ対応すると考えられる。

方 法

1. 調査対象者

対象は、名古屋市と刈谷市を中心とする東海地方の中学生とその母親、父親から構成されている583世帯のうち、共働き家庭448世帯である。対象者の属性などは以下のとおりである。①職業：父親；会社員251名(56.0%)、教員8名(1.8%)、公務員16名(3.6%)、自営業49名(10.9%)、その他21名(4.7%)、未記入(ただし、他の回答内容から有職と

判断できる者)103名(23.0%)。母親；会社員57名(12.7%)、教員13名(2.9%)、公務員11名(2.5%)、パートタイム307名(68.5%)、その他51名(11.4%)、未記入(ただし、他の回答内容から有職と判断できる者)9名(2.0%)。②平均年齢：父親40.63歳($SD=5.04$, レンジ=30-60)、母親38.59歳($SD=4.25$, レンジ=30-50)、対象児14.03歳($SD=4.78$, レンジ12.75-15.67)。③子どもの人数：1人43世帯(9.6%)、2人228世帯(50.9%)、3人133世帯(29.7%)、4人19世帯(4.2%)、5人8世帯(1.8%)、未記入17世帯(3.8%)。④対象児の性別：男児218名(48.7%)、女児217名(48.4%)、未記入13名(2.9%)。

2. 調査期間

平成23年11月から平成24年2月に質問紙の配布回収を行った。

3. 調査方法

東海の教育委員会に調査依頼をし、協力を得られた中学校に人数分の依頼状および質問紙を郵送した。質問紙は母親用、父親用、子ども用を別々に冊子にしてまとめて同封し、記入後、同封の返信用封筒に入れて返送してもらった。

4. 質問紙

(1)父親用 ①父親の生活形態；父親の生活形態の特性を明らかにするため、尾形(2009)の仕事(私は仕事もうまく行っているときは、表情に出やすい、など)と家庭(私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大事にしている、など)の関与状況を測定する尺度に、余暇(自分の趣味など時間をとってゆっくりと楽しむのが好きだ、など)、地域活動への関与状況(町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい、など)を測定する項目を加えた22項目を使用した。「かなりあてはまる(5点)」～「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。②夫からみる夫婦関係；夫や妻が自分たちの夫婦関係をどのようにみているかを明らかにするため、「私たちは、申し分のない結婚生活を送っている」などの夫婦の満足度を測定する6項目(諸井, 1997)と、「私は妻と納得の行くまで話することが良くある」などの夫婦間のコミュニケーションを測定する13項目(大野・柏木, 1992)に、「私は妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい」という夫婦で行動を共にすることへの要望に関する1項目(オリジナル)を加えた20項目を使用した。「かなりあて

はまる(5点)～「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。③父親の状態不安;父親の状態不安を明らかにするため、清水・今栄(1981)の状態不安を測定する尺度(STAI)のうち、10項目を選択して使用した。10項目選択の理由は以下の通りである。夫婦の生活形態特性が家族成員の状態不安にどう関与するか検討するには、全成員に同じ指標を用いて測定した方が把握しやすい。そのため、中学生にも、18歳以上を対象に作成されたこの尺度で測定する必要がある。そこで、中学生自身が回答しやすいよう、塚本(2013)を参考に、不安状況下の自身の内面状態がより明確にイメージしやすい項目(私は不安である、など)を選択した。「かなりあてはまる(5点)～「全くあてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。

(2) **母親用** ①フェイスシート;父親・母親の職業、家族構成、子どもの年齢・性別について記入を求めた。②母親の生活形態;父親と同様の尺度を使用した。③妻からみる夫婦関係;父親(夫)と同様の尺度を使用した。④母親の状態不安;父親と同様の尺度を使用した。

(3) **子ども用** 子どもの状態不安;父親と同様の尺度を使用した。

なお、いずれの尺度使用に関しても著作権の問題はクリアしている。

結 果

以下の統計処理は、SPSS21.0を用いた。

1. 各因子の構造

(1) **父親および母親の生活形態特性** 生活形態に関する22項目の質問について、各項目に1～5点を付与し、父母それぞれについて、主因子法による因子分析(プロマックス回転)を実施した。父母ともに、固有値の減衰状況や累積寄与率から4因子が適切であると判断し、1つの因子にのみ絶対値.40以上の負荷量を基準に項目を選択した。父親についてはTable 1のとおりであり、第1因子を「家庭関与」、第2因子を「仕事関与」、第3因子を「余暇活動」、第4因子を「地域活動」と命名した。なお、これら4つの下位尺度のCronbachの α 係数による信頼性については、.764-.802という数値が得られ、4つの下位尺度得点(各項目の得点の合計/項目数)を算出した。母親についてはTable 2のとおりであ

り、第1因子を「仕事関与」、第2因子を「家庭関与」、第3因子を「余暇活動」、第4因子を「地域活動」と命名した。なお、これら4つの下位尺度のCronbachの α 係数による信頼性については、.725-.788という数値が得られ、4つの下位尺度得点(各項目の得点の合計/項目数)を算出した。

なお、父母ともに既存の尺度から推測される因子が抽出されたと考えられる。

(2) **夫および妻からみる夫婦関係** 夫婦関係尺度20項目に1～5点を付与し、夫婦別に主因子法による因子分析(プロマックス回転)を実施した。固有値の減衰状況や累積寄与率から、夫婦ともに2因子が適切であると判断し、1つの因子にのみ絶対値.40以上の負荷量を基準に項目を選択した。その結果、第1因子(夫16項目、妻15項目)は夫婦ともに、「妻(夫)との関係によって、私は幸福である」、「夫婦でお互いを思いやっている」などの項目の負荷が高く、夫婦間の良好な関係性を示す内容であることから「良好な関係」と命名した。第2因子(夫婦とも4項目)も夫婦ともに、「妻(夫)には私の話をよく聞いてほしい」、「妻(夫)には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい」などの項目の負荷が高く、相手に対する要望の高さを示す内容であることから「相手への要望」と命名した。なお、これら2つの下位尺度のCronbachの α 係数による信頼性について、夫はそれぞれ.958,.791、妻はそれぞれ.958,.753という比較的高い数値が得られた。各々2つの因子得点(各項目の得点の合計/項目数)を算出した。

なお、夫婦ともに、既存の尺度から推定される因子が抽出されたと考えられる。

(3) **父親・母親・子どもの状態不安** 状態不安尺度10項目について、各1～5点を付与し、主因子法による因子分析(プロマックス回転)を実施した。固有値の減衰状況や累積寄与率から父・母・子どもともに1因子が適切であると判断し、絶対値.40以上の負荷量を基準に項目を選択した。父・母・子どもとも第1因子(10項目)を「状態不安」と命名した。このCronbachの α 係数による信頼性については、父親は.902、母親は.869、子どもは.834という高い数値が得られた。3者それぞれについて、因子得点(各項目の得点の合計/項目数)を算出した。

なお、父母子ともに既存の尺度と同様の因子が抽

Table 1 父親の生活形態の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	因子					
	1	2	3	4		
1. 私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大事にしている	.750	.047	-.081	-.070		
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことだけでなくいろいろな話をしている	.737	-.050	.021	-.048		
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	.693	.065	-.043	.016		
5. 私は忙しくて家族との会話が少ない (*)	-.628	.206	-.025	.050		
4. 私は子どもの将来のことについてよく相談にのる	.600	.067	.099	.052		
6. 私は休暇のとき、家族とかかわらず、一人でのんびりしていることがある (*)	-.470	.050	.286	-.115		
19. 時間を作って妻と旅行などに行きたいと思う	.456	.022	.094	-.089		
7. 私は家族に自分の生き方を話すことがある	.433	.149	.172	.069		
12. 私は仕事もうまく行っているときは、表情に出やすい	-.052	.709	.046	-.010		
10. 私は休暇のときでも仕事のことが頭から離れないことがある	-.103	.689	-.053	-.081		
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている	.028	.611	-.023	-.101		
11. 私は仕事が順調なとき、家族と良く話をする	.057	.595	-.058	.089		
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	-.012	.471	.000	.044		
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	.129	.414	.035	.133		
21. 自分の趣味など時間をとってゆったりと楽しむのが好きだ	-.012	.047	.775	-.042		
14. 私は時間があるときは、自分の趣味を行うことがある	.057	-.134	.673	.037		
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ	-.045	-.063	.642	.051		
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.046	.098	.590	-.052		
16. 町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい	-.008	-.002	.065	.941		
17. 町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである (*)	.051	.001	.130	-.648		
22. 休日など地域とのかかわりが多い方だ	-.028	.003	.060	.641		
(*) は逆転項目	固有値	4.118	2.537	2.409	2.002	
	α係数	.802	.764	.764	.772	
	因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	
		因子 1	—	.217	.117	.241
		因子 2		—	.117	.141
		因子 3			—	.092
		因子 4				—

出されたと考えられる。

2. 夫婦の生活形態特性

夫婦の生活形態の特性を捉える²⁾ため、夫と妻の4因子得点を基にした階層的クラスター分析(ウォード法)を行った³⁾。結合距離(ユークリッ

ド距離)9~11において5つのクラスターに分かれた。5クラスターは、生活形態の4因子(z得点)の一元配置の分散分析および平均値(Table 3)ならびに平均値のz得点(Figure 1)に基づき、夫婦が家庭・仕事・余暇・地域の4領域へどのように関与しているかを検討したところ、下記の特徴が明らかになった。

クラスターIは夫婦ともに家庭と余暇への関与が高いことから「夫婦家庭・余暇型」とした。クラスターIIは夫婦ともに余暇への関与が比較的高いことから「夫婦余暇型」とした。クラスターIIIは夫婦ともにどの領域にも関与が低い(平均値では夫婦の家庭関与や夫の余暇は5点満点中3点を超えているが、クラスター内で4,5番目に位置していることから他に比べて低いと判断した)ことから「夫婦低活動型」とした。クラスターIVは夫婦ともにどの

²⁾ 平成13年度国民生活白書(内閣府, 2002)が家族の視点から働き方の多様化について論じたことを皮切りに、労働者のライフスタイルに合わせた働き方の推進が図られつつある。男性も女性も働き方が多様化し、共働き家庭における夫婦の生活形態は非常に多岐にわたることが推測される。しかし、本研究では、共働き家庭のWLBに見られる共通点を明らかにすることを目的とするため、このクラスター分析を用いて、夫婦の生活形態のいくつかの特性に基づいたグループを抽出していく。

³⁾ クラスター分析とは、変数間に意味のあるまとまり(クラスター)を見つけ出す多変量解析である(古谷野, 2001)。

Table 2 母親の生活形態の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目内容	因子				
	1	2	3	4	
12. 私は仕事があまく行っているときは、表情に出やすい	.753	.036	-.026	.051	
11. 私は仕事が順調なとき、家族と良く話をする	.670	.031	.030	-.006	
10. 私は休暇のときでも仕事のことが頭から離れないことがある	.633	-.102	-.094	-.059	
8. 私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	.630	-.106	-.090	-.030	
9. 私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている	.572	.127	.047	-.004	
13. 私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	.546	.078	.045	.161	
1. 私は休暇のとき、夫と一緒にいる時間を大事にしている	.141	.687	-.026	-.036	
3. 私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	.060	.604	.000	.063	
5. 私は忙しくて家族との会話が少ない (*)	.279	-.553	.055	-.046	
2. 私は家族で食事をするとき、仕事のことでだけでなくいろいろな話をしている	-.035	.537	.107	-.031	
19. 時間を作って夫と旅行などに行きたいと思う	.176	.527	.114	-.090	
6. 私は休暇のとき、家族とかかわらず、一人でのんびりしていることがある (*)	.097	-.453	.357	-.006	
4. 私は子どもの将来のことについてよく相談にのる	-.042	.449	.052	.057	
21. 自分の趣味など時間をとってゆっくと楽しむのが好きだ	-.046	.059	.771	-.120	
20. 時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.033	.063	.634	-.171	
14. 時間は時間があるときは、自分の趣味を行うことがある	-.068	.023	.625	.180	
15. 日曜日などは自分の時間を作って楽しむ	-.030	-.045	.554	.243	
16. 町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい	.071	.005	.013	.863	
17. 町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである (*)	.055	-.010	.102	-.780	
22. 休日など地域とのかかわりが多い方だ	.059	.003	.113	.471	
(*) は逆転項目	固有値	3.330	2.841	2.424	1.993
	α係数	.788	.725	.729	.755
	因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
	因子 1	—	.018	.152	.020
	因子 2		—	.078	.029
	因子 3			—	.123
	因子 4				—

Table 3 夫婦の生活形態特性クラスター別 4 領域の平均値

	夫				妻			
	家庭	仕事	余暇	地域	家庭	仕事	余暇	地域
I	4.02	2.96	4.27	1.80	4.29	2.63	3.80	2.35
II	3.03	2.57	4.03	2.59	3.24	2.61	3.69	2.36
III	3.25	2.84	3.08	2.01	3.55	2.45	2.94	2.41
IV	3.57	3.05	3.69	2.88	3.90	3.19	3.73	3.14
V	4.03	3.08	3.20	2.71	3.99	3.54	2.65	1.79

領域にも程よく関与していることから「夫婦中活動型」とした。クラスター V は夫婦ともに家庭と仕事と比較的高い (夫の仕事関与は 3 点程度であるが、他のクラスターの中で最も高いことから、関与が高いと判断した) ことから「夫婦家庭・仕事型」とした。

母親の就業形態 (フルタイム・パートタイム) に

よる家族への影響の相違も報告されている (三輪・青山, 2014) ことから、上記の 5 クラスターに母親の就業の偏りがなく検討した。その結果、フルタイムとパートタイムの割合 (不明やその他を除く) は、I で 19.4% と 80.6%, II で 23.2% と 76.8%, III で 13.4% と 86.6%, IV で 23.5% と 76.5%, V で 36.8% と 63.2% であり、 χ^2 検定において有意差が見られなかったことから、この後の分析でみられるクラスター間の差異は母親の就業形態の差異によるものではないと考えられる。

3. 父母の生活形態特性が夫婦関係・状態不安に及ぼす影響

父母の生活形態において、5 つのクラスターの特徴が、夫婦関係、状態不安にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするため、5 つのクラスターを独立変数、夫および妻からみる夫婦関係、父親・母親・子どもの状態不安の 5 つすべての変数を

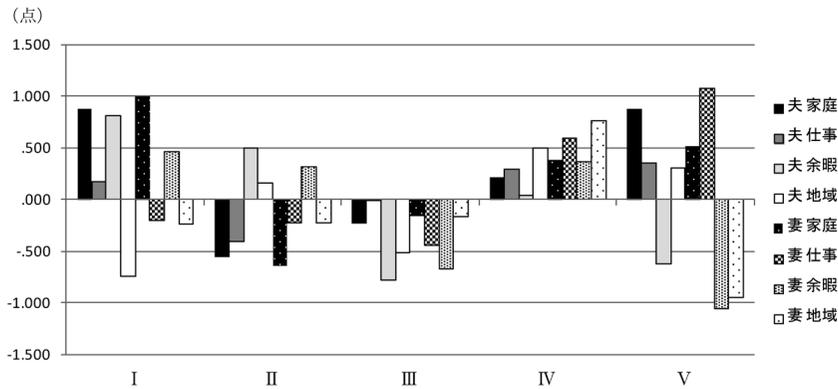


Figure 1 父母の生活形態の5つのクラスターの特徴 (z得点)

従属変数とする一元配置の分散分析を実施し⁴⁾、有意差のあるものについては Tukey 法による多重比較を行った。Table 4 は、各変数の平均値・標準偏差・最小値・最大値および分散分析・多重比較の結果を表したものである。

夫婦関係については、夫の「良好な関係」で有意差が見られ ($F(4, 347)=20.91, p<.0001$)、多重比較の結果、 $I>II \cdot III \cdot IV$ (順に $p<.0001, p<.0001, p<.01$)、 $II<IV \cdot V$ (いずれも $p<.0001$)、 $III<IV \cdot V$ (順に、 $p<.01, p<.001$) といった有意差が見られた。また、夫の「相手への要望」で有意差が見られ ($F(4, 347)=5.52, p<.001$)、多重比較の結果、 $I>II \cdot III \cdot V$ (順に $p<.05, p<.01, p<.001$)、 $IV>V(p<.05)$ といった有意差が見られた。さらに、母の「良好な関係」でも有意差が見られ ($F(4, 338)=20.83, p<.0001$)、多重比較の結果、 $I>II \cdot III \cdot IV$ (順に $p<.0001, p<.0001, p<.05$)、 $II<IV \cdot V$ (順に $p<.0001, p<.001$)、 $III<IV \cdot V$ (順に $p<.001, p<.05$) といった有意差が見られた。そして、妻の「相手への要望」でも有意差が見られ ($F(4, 348)=2.72, p<.05$)、多重比較の結果、 $I>II(p<.05)$ という有意差が見られた。これらのことから、I「夫婦家庭・余暇型」は比較的夫婦関係が良好で、なおかつ相手への要望が高く、II「夫婦余暇型」ならびに III「夫婦低活動型」は夫婦関係があまり良好でないことが窺える。

次に、状態不安については、父で有意差が見られ ($F(4, 347)=4.46, p<.01$)、多重比較の結果、 $I \cdot V<III$ (順に $p<.01, p<.05$) という有意差が見られた。また母でも有意差が見られ ($F(4, 347)=2.63, p<.05$)、多重比較の結果、 $I<II \cdot III$ (いずれも $p<.05$) という有意差が見られた。子どもの状態不安については群間で有意差は見られなかった。これらのことから、父母ともに I「夫婦家庭・余暇型」は比較的不安が低く、III「夫婦低活動型」は比較的不安が高いことが窺える。また、親の生活形態特性と子どもの状態不安には有意な関連が見られないことも明らかになった。

考 察

夫婦の生活形態についてクラスター分析したところ、クラスター I「夫婦家庭・余暇型」、クラスター II「夫婦余暇型」、クラスター III「夫婦低活動型」、クラスター IV「夫婦中活動型」、クラスター V「夫婦家庭・仕事型」という5つの生活形態特性が抽出された。これらの特徴を持つ夫婦の生活形態が夫婦関係や家族の状態不安にどのような影響をもたらすのかを検討したところ、複数の群間に有意差が見られ、夫婦の生活形態によって家族に及ぼす影響が異なることが明らかになった。これらの影響については以下のように考える。

1. 夫婦の生活形態特性が夫婦関係に与える影響

夫婦関係については、「夫から見る良好な関係」においても「妻から見る良好な関係」においても、I「夫婦家庭・余暇型」が II「夫婦余暇型」、III「夫婦低活動型」、IV「夫婦中活動型」よりも有意に高

⁴⁾ 多変量検定内の分散共分析行列の等質性の検定を行ったところ、有意傾向の差が見られ、従属変数の等質性が保障されない(出村・小林, 2004)と考えられたため、一元配置分散分析を実施した。

Table 4 父母の生活形態特性における各変数の平均値・標準偏差・レンジおよび分散分析・多重比較の結果

変数	生活形態特性	度数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	F値	有意確率	多重比較
父・夫婦関係 良好な関係	I	39	4.33	.501	3.31	5.00	20.91	****	I>II・III**** I>IV** II<IV・V**** III<IV** III<V***
	II	104	3.36	.827	1.00	5.00			
	III	89	3.55	.657	2.06	4.88			
	IV	97	3.89	.605	1.94	5.00			
	V	23	4.23	.622	2.56	5.00			
相手への要望	I	37	3.61	.897	1.00	5.00	5.52	***	I>II* I>III** I>V*** IV>V*
	II	104	3.14	.721	1.00	5.00			
	III	91	3.12	.733	1.00	5.00			
	IV	96	3.33	.704	1.75	5.00			
	V	24	2.78	1.038	1.00	4.75			
母・夫婦関係 良好な関係	I	39	4.24	.528	3.20	5.00	20.83	****	I>II・III**** I>IV* II<IV**** II<V*** III<IV**** III<V*
	II	102	3.17	.836	1.07	4.87			
	III	87	3.37	.732	1.13	4.93			
	IV	92	3.81	.635	1.00	5.00			
	V	23	3.87	.898	2.00	5.00			
相手への要望	I	39	3.91	.668	2.25	5.00	2.72	*	I>II*
	II	104	3.50	.721	1.00	5.00			
	III	91	3.57	.648	2.00	5.00			
	IV	97	3.56	.728	1.00	5.00			
	V	22	3.69	.707	2.25	5.00			
父・状態不安	I	37	2.31	.731	1.00	4.80	4.46	**	I<III** III>V*
	II	106	2.67	.750	1.00	5.00			
	III	90	2.78	.708	1.10	5.00			
	IV	97	2.53	.613	1.20	4.10			
	V	22	2.32	.694	1.30	3.30			
母・状態不安	I	38	2.92	.871	1.14	4.43	2.63	*	I<II・III*
	II	106	2.88	.770	1.00	4.86			
	III	92	3.02	.812	1.00	5.00			
	IV	97	2.85	.853	1.00	5.00			
	V	22	3.14	.991	1.29	4.71			
子ども・状態不安	I	39	3.18	.711	1.60	4.60	1.38	n.s.	—
	II	99	3.11	.768	1.00	4.80			
	III	85	3.01	.814	1.00	4.90			
	IV	90	3.15	.755	1.30	4.90			
	V	23	2.88	.919	1.00	4.60			

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, **** $p<.0001$

いこと、IV「夫婦中活動型」やV「夫婦家庭・仕事型」がII「夫婦余暇型」およびIII「夫婦低活動型」より有意に高いことが示された。このことから、少なくとも家庭にある程度関与が高いという生活形態を有する夫婦は、夫婦ともに余暇に専念していたり、夫婦ともに力を入れている領域がない生活形態よりも夫婦関係が良好であることが窺える。

以下、夫婦の家庭関与と夫婦関係との関連について考察する。稲葉(1998)は「夫婦の情緒関係仮説」から、家庭への関与度合いの高い男性は、夫婦の情

緒関係が強いとしている。この仮説は、夫婦で一緒に外出や買い物をするといった情緒的な共同行動が90年代後半頃から出現したことに伴い、夫婦関係が良好な男性は妻との共同行動として家庭への関与を高めるといものである。また、妻においても、夫婦関係満足度は夫婦で共有する休日の「くつろぎ」「趣味・娯楽・スポーツ」、平日の「食事」「くつろぎ」などの共有が大きく影響する(山口, 2007)としており、夫の家庭関与の重要性が見出せる。

こうした夫婦の共同（共有）行動と夫婦関係との関連性を示す報告から、「家庭関与の高い夫婦は夫婦関係が良好」という今回の結果は裏付けられるだろう。

もう一つの結果は、父母ともにI「夫婦家庭・余暇型」はII「夫婦余暇型」より相手への要望が高いということである。相手への要望が高いということは、一見、相手に不満があることを示しているように感じる。しかし、本結果では、I「夫婦家庭・余暇型」の夫婦関係は良好であることが示されている。この点に関しては、I「夫婦家庭・余暇型」が夫婦ともに「相手への要望」が高いことがポイントであると考えられる。中年期の夫婦のコミュニケーションを事例的に検討した難波(1999)によれば、妻は夫婦で自分の意見を言い合い、どうしたらよいか話し合うことを求めるのに対し、夫は都合が悪くなると怒ったり、黙ったり、無視したりするという態度で応じやすいという。そのような場合、妻も諦めて逆らわないという。平山・柏木(2001)においても、中年夫婦の夫は、「無視・回避」、「威圧」という否定的態度の得点が妻より高かったという。このような中年期の夫婦の特徴と比べて、I「夫婦家庭・余暇型」の夫婦はともにしっかり相手への要望を有しており、互いに家庭への関与が高いことから、対称的なコミュニケーションが可能になっていると推測される。このことは、妻の望むコミュニケーション形態であり、夫もそれを望んでいるとすれば、I「夫婦家庭・余暇型」の夫婦関係が良好で、相手への要望が高いという結果に矛盾はないと考えられる。

2. 夫婦の生活形態特性が家族の状態不安に与える影響

状態不安については、父母ともに、I「夫婦家庭・余暇型」はIII「夫婦低活動型」より低いという結果が得られた。この結果について、不安と活動の関連から考察する。そもそも、不安が強い状態であれば、どの領域にも積極的に活動できないことは想像に難くない。また、低活動であることは不安を低減するための策を講じていないとも推測される。厚生労働省(2000)が打ち出した休養・こころの健康づくりの対策(日本健康21)では、単に何もしないで過ごすような休息だけでは真の「休息」にはならないこと、ストレス解消(不安は一種のストレ

ス状態)には「積極的休息」、つまり趣味やスポーツ、ボランティア活動などで週休を積極的に過ごすことの重要性を挙げている。夫婦低活動型の父母においては、余暇への関与が低いことから、積極的休息が取られていないことが推測される。

もちろん、余暇さえ充実していればよいわけではない。そのことは、母親においてII「夫婦余暇型」はI「夫婦家庭・余暇型」より状態不安が高いという結果を見てもわかるだろう。また、父親においてIII「夫婦低活動型」はV「夫婦家庭・仕事型」よりも状態不安が高いという結果と併せると、夫婦ともに家庭関与が高いことが、不安低減に関与することが窺える。そこで、不安低減と家庭関与との関連について考える。総理府(2014)の日常生活での悩みや不安に関する調査から、30,40代は男女ともに不安を抱える率が徐々に高まりつつある世代と捉えられる。そうした年代の半数以上が、家庭の役割として「互いに助け合い、支え合う」ことを重視している(経済企画庁, 1995)。つまり、夫婦ともに家庭関与が高いということは、こうした家庭に求める役割が達成されており、それが不安の低減に一役買っていると推測される。

子ども(中学生)の状態不安については、今回の調査結果では両親の生活形態特性との関連は見られなかった。これに関して、思春期にある中学生は、進学など将来の選択を迫られたり、成長に伴う身体の変化を経験したりなど、精神的に大きな影響を与える要因が多い時期である(福田, 2009)。このように、家庭以外の大きな影響要因が存在するために、両親の生活形態特性との関連が見出されなかったと考えられる。

今後の課題

今回の結果から、夫婦ともに最低限、家庭への関与を高めること、さらにその他の領域(+余暇、+仕事・余暇・地域、+仕事)にも関与を高くすることが、この時期の夫婦の生活形態として適している、つまりWLBの取れた状態と推察される。一方、夫婦ともに余暇のみに興じたり、どの領域にも高く関与しないことは、この時期の夫婦の生活形態として適さないことが示された。しかしながら、子ども(中学生)にとって、両親がどのような生活形態を有していることが適切かは明らかにされなかつ

た。その背景は先述の通りだが、他のライフステージの子どもを持つ家庭を対象に同様の分析を行うことによって、さらに理解を深めることが可能であろう。

尺度について、今回使用した親の生活形態に関する尺度は、WLBに関係する4領域から生活形態の特性を測定することが可能であった。また、夫婦関係に関する尺度は夫婦の満足感やコミュニケーション、共同行動に対する要望という幅広い側面を測定できるものであった。さらに、状態不安に関する尺度は、不安状況下の自身の内面状態がより明確にイメージしやすい項目を用いることで親子が同指標で測定でき、3者の比較を容易にした。いずれも、既存尺度から推測される因子が抽出され、信頼性も確認された。しかし、既存尺度との関連性等については未検証である。また、今回の生活形態特性を捉える尺度では、実際に各領域における活動時間や労力は把握できていない。今後は、このような未検証の箇所を検証するとともに、時間の実測値から捉える生活形態特性も併せて検討していく必要があると考えられる。

さらに、今回抽出されなかった、「家庭のみ」「仕事のみ」のような偏った生活形態特性が親自身や家族に与える影響についても検討が必要だと考えられる。

引用文献

- 赤岡 功 1993 エレガント・カンパニー 有斐閣。
 安齋 徹 2012 ワーク・ライフ・バランス5次元モデル 日本労務学会誌, 13, 17-28。
 Carter, B., & McGoldrick, M. 2005 *The Expanded Family Life Cycle: Individual, Family, and Social Perspective* (3rd ed). New York: Pearson Allyn & Bacon.
 出村慎一・小林秀紹 2004 健康・スポーツ科学のためのSPSSによる多変量解析入門 杏林書院。
 福田佳織 2009 青年の自立一家族との関係 宮下一博(監修) ようこそ! 青年心理学—若者たちは何処から来て何処へ行くのか ナカニシヤ出版 pp. 40-50。
 平山順子・柏木恵子 2001 中年期夫婦のコミュニケーション態度—妻と夫は異なるか? 発達心理学研究, 12, 216-227。
 稲葉昭英 1998 どんな男性が家事・育児をするのか?—社会階層と男性の家事・育児参加 渡辺秀樹・志田基と師編 階層と結婚・家族 1995年SSM研究会 pp. 1-42。
 岩下好美 2010 現代日本の父親とワーク・ライフ・バランスの実態 *Global COE Program "Science of Human Development for Restructuring the 'Gap-Widening Society'"*, 12, 1-10。
 Kahn, R. L., Wolfe, D. M., Quinn, R. P., Snoek, J. D., & Rosenthal, R. A. 1964 *Organizational Stress: Studies in Role Conflict and Ambiguity*. New York: Wiley.
 経済企画庁 1995 国民生活選好度調査 <http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h10/wp-pl198bun-1-5-3z.html> (アクセス日: 2015年7月17日)
 厚生労働省 2000 21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)について(報告書) 健康日本21企画検討会・健康日本21計画策定検討会 http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/pdf/ala.pdf (アクセス日: 2015年1月20日)
 古谷野亘 2001 数学が苦手な人のための多変量解析ガイド 調査データのまとめかた 川島書店。
 久保恭子・倉持清美・岸田泰子・及川裕子・田村毅 2013 幼児をもつ父親のワークライフバランスとその関連要因 東京学芸大学紀要(総合教育科学系II), 64, 203-209。
 Marks, S. R. 1977 Multiple role and role strain. *American Sociological Review*, 42, 921-936。
 丸尾直美 2010 ワーク・ライフ・バランスと新しい家族像 *Culture, Energy and Life*, 93, 47-49。
 Minuchin, S. 1980 *Families and Family Therapy*. London: Tavistock Publications. (山根常男(監訳) 1984 家族と家族療法 誠信書房)
 三輪 哲・青山祐季 2014 子どもの意識に対する母親の働き方の影響の再検討 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 6, 19-36。
 望月 嵩 1980 現代家族の生と死 望月 嵩・木村汎(編著) 現代家族の危機 新しいライフスタイルの設計 有斐閣 pp. 2-22。
 諸井克美 1997 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性—女子青年の場合— 家族心理学研究, 11, 69-81。
 内閣府(編) 2002 平成13年度国民生活白書 ぎょうせい。
 内閣府 2007 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章 http://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html (アクセス日: 2014年7月30日)
 内閣府 2013 男女共同参画白書 第1部 男女共同参画社会の形成の状況(平成25年版) http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/honpen/b1_s00_02.html (アクセス日: 2015年1月20日)
 難波淳子 1999 中年期の日本人夫婦のコミュニケーションの特徴についての一考察—事例の分析を通して 岡山大学大学院文化科学研究科紀要, 8, 69-85。

- 尾形和男 2009 父親の多重役割が家庭状況と家族成員の生活感情に及ぼす影響—大学生を対象として 学校法人昌賢学園論集, 6, 71-102.
- 小野公一 1993 職務満足感と生活満足感 白桃書房.
- 大野祥子・柏木恵子 1992 家庭における父親(1) —父親の存在感の規定因 発達研究: 発達科学研究教育センター紀要, 8, 129-154.
- 坂野雄二・菅野純・佐藤正二・佐藤容子 1996 ベーシック現代心理学 臨床心理学 有斐閣.
- 佐藤安子 2011 状態不安を予測しうるストレスモデレーター要因の検討 臨床心理学部研究報告, 3, 69-78.
- 佐藤淑子 2013 育児期家族の生活と心理 鎌倉女子大学紀要, 20, 1-10.
- Sieber, S. D. 1974 Toward a theory of role accumulation. *American Sociological Review*, 39, 567-578.
- 島田恭子・島津明人・川上憲人 2012 未就学児を持つ共働き夫婦におけるワーク・ライフ・バランスと精神的健康—1年間の縦断データから— 厚生学指標, 59, 10-18.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348-353.
- 総理府 2014 国民生活に関する世論調査 <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-life/zh/z22.html> (アクセス日: 2015年7月17日)
- 田村正勝 2009 ボランティア論 ミネルヴァ書房.
- 塚本真紀 2013 不安状況下における言語行動に関する検討 尾道市立大学芸術文化学部紀要, 12, 37-42.
- Voydanoff, P. (2005). The differential salience of family and community demands and resources for family-to-work conflict and facilitation. *Journal of Family and Economic Issues*, 26, 395-417.
- 渡辺 峻 2009 ワーク・ライフ・バランスの経営学 中央経済社.
- 山口一男 2007 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, 73, 55-60.

(受稿: 2015.3.3; 受理: 2016.2.15)